昭和の南海地震体験談

氏　　名：真鍋　政次（まなべ　まさじ）
生年月日：昭和 2 年 6 月 13 日
地震を体験した場所：白浜町
当時の家族状況：祖母、父、母、弟、妹三人

1）地震発生時の状況

当時 19 歳、寝ていたが、凄く揺れたので、父と、自宅前の海を見に行く。

「あぶき」が上下するので、父が「津波来るぞ！」と言って戻って、家族と徒歩 1～2 分の所にある、家の前の真鍋家墓所(小山)に避難する。

近隣の人達も 100 人ぐらい避難して来ていた。一旦小山に逃げたが、なかなか津波が来ないので、私だけ山を降りて家まで行き、家の前に積んであった焚き木を二抱え持って、山に戻った。寒い時だったので焚き木をして皆に、感謝されたことを覚えている。

2）津波襲来時の状況

しばらく(10 分)したら、ガラスの“バリバリ“割れる音がして津波来襲。墓所の階段、上から三段目まで波来た。

3）家族の行動･被害

全員、小山に逃げて無事。

真鍋家墓所で、この山の上に 100 人が上がった

4）集落･周囲の被害

夜が明けてから家に戻ると家は残っていた、壁は崩落したが流されていなかった。

鴨居の所まで、波来ていた。障子に芋壷のさつま芋が刺さっていた。

米は船底に塗るコールタールと一緒に庭に流れて駄目だった。洗っても食べられなくて父が、悔し涙を流したのを覚えている。

集落全体床上 2m位。人は 14 人死亡。水道は古賀浦の霊泉橋が流出した時同時に、水道管も流出して、12 月 30 日まで復旧せず。自宅の井戸が重宝された。電気は 12 月 26 日まで復旧せず。

5）地震･津波後の生活

山から戻って、家は、とりあえず板切れで、仮に修繕して住んだ。片付けも自分達でした。あちこち捜索で見て回った時、沢山人が死んで浮いていた、知っている人知らない人…、親類も死んだ。毛布や軍服の払い下げを貰った記憶がある。

自分の船が流出して捜していたところ、1km離れた山に流されていて、2,3 日して連絡を貰って取りに行った。

半農半漁では、現金収入が無いから復興事業に従事して、5 年ほど、海岸線などの復興をした。その後、恩師の誘いで教職についた。

6）次の災害への備え

非常持ち出し袋は用意している。

地域では、35 年のチリ津波のあと、地域全体を嵩上げした。

7）その他

昭和 19 年の東南海地震は、学徒動員で八尾に行き、訓練中に被災、二階建ての兵舎が揺れて、隣の兵舎と引っ付いて見えるぐらいの揺れだった。新宮の津波の被害を心配した隊長に家の戻るように言われて戻ったことがある。終戦後、昭和 21 年 2 月まで台湾でいて、引き上げてきた。

＜南海地震&チリ津波潮位標＞